

丸山眞男著「盛り合せ音楽会」丸山眞男集第3巻、岩波書店 1995年9月7日刊を読む

1. (1)僕はピアノが一番好きなので、ピアノ・リサイタルはほかの音楽会に比べては足をはこぶ方ですが、僕がいつもうんざりさせられるのは、なによりも曲目の選択し方なのです。
(2)小綺麗に印刷されたプロを見て御覧なさい。大抵は古典音楽と浪漫派と現代音楽とから夫々^{それぞれ}一曲か二曲ピックアップして大小ほどよくあしらったというたぐいのものです。例えばバッハのプレリュードとフーガから一曲二曲、ベートーヴェンのソナタが一つ、ショパンのエチュードとかバラードから数曲、おしまいはドビュッシィかラヴェルの小曲といった風の配列がまずおきまりといってもいいでしょう。
(3)僕はこういった音楽会を「盛り合せ音楽会」と呼びます。
(4)古典から現代までのピアノ音楽史を僅か一晩のプロに圧縮して聴かせてくれると思えば有り難いのかも知れませんが少くも僕にとっては有難すぎて迷惑です。なぜなら僕は音楽を楽しみに音楽会に行くのであって、音楽史の勉強に行くではありませんから。
(5)そうして僕は上の様な「盛り合せ」音楽会からは、たとい演奏がいかによくても十分の楽しみは決して得られないのです。考えても御覧なさい。
(6)バッハのフーガの醸し出す音楽的情緒とラヴェルの「水の戯れ」の醸し出すエフェクトとはまったく異ったものです。
(7)それは殆んどベートーヴェンとショパンとの間だって同じです。音楽を通じて、「人類の哀れな女々しい魂を鞭うつ頑強な精神」を与えようとしたベートーヴェンがもし現代に生きて自分の曲とショパンの変ホ長調のノクターンとが並んでプロに載っているのを見たらどんな顔をするでしょうか。
(8)モーツァルトのソナタを聴いてその清冽な和音がまだ耳から消え去らないうちにドビュッシィの「沈める寺」のあの調性も定かでない模糊とした雰囲気の中に入り込むことを要求されて当惑するのは、当惑するのがおかしいのか、それとも要求する方が無理かどっちでしょう。形式と構造を全く異にし、従ってその「精神」も全く異質的な曲を次々と事もなげに弾きまくるステージのピアニストと、それをまた当然至極と心得て拍手を送っている聴衆とを見比べながら僕はいつも何ともいえない複雑な感情に苦しめられるのです。
2. (1)僕の論法を進めて行くと何々アーベントといったふうに同一人の、もしくは同傾向の作品だけを選んだ音楽会以外は無意味だという結論にならざるをえません。
(2)恐らくこんな暴言は楽壇人や音楽通をもって任ずる人々は決して吐かないでしょう。音楽はそんなに頑ななものじゃないといって叱られるにきまっています。
(3)僕もべつに僕の趣味を押しつける気は毛頭ありません。そういう盛り合せ音楽会で感興を得られる方は存分にお楽しみになるがいいです。ただ僕は自分の感性にさからってまでそうした人々の仲間入りをしたいとは思いません。
3. (1)今日と明日、朝と夕どころか、夕べの^ひ一と時に、バッハとベートーヴェンとショパンとドビュッシィとラヴェルとを同時に聴いて同じ様に享受しうる精神とは一体全体何物なのでしょう
(2)それはゲートを遥かにこえる殆んど神に近い豊富な感受力を持った魂か、さもなければ——凡そ一切の内面性を欠いた張子の様に虚ろな魂だということにならないでしょうか。

4. (1) しかもこう考えて来ると事は決して音楽だけの問題ではない様です。
- (2) ラートブルッフが指摘した様な教養の無政府的受容の傾向は今日幾層倍かに拡大されて、わが祖国日本のあらゆる領域に発現しています。
- (3) もともと明治以来、食うものも食わずに次から次とヨーロッパの「新知識」をつめこんで来た光輝ある伝統を持つこの国の小市民インテリ層は、しばらくサーベルの力で閉ざされていた「教養」の水門が終戦で一度に開かれると共に、どっとばかりなだれ込んでマルクスござれ、サルトルござれ、キリストござれヤスパースござれ、親鸞ござれウェーバーござれ手当たり次第にがつがつと呑込んだそのすさまじさは、誰よりあなたの様な編集者が一番よく御承知でしょう。
- (4) そうでなくてさえ、不均衡な、からだのたべものとあたまのたべもの間のひらきはますます大きくなって、ぎっしりつまった教養のリュックがやせさらばえた肩に喰い込んでいるさまは痛々しい限りですが、本人は結構得意の様に見えます。
- (5) しかもこのリュックの中味の雑多なことときたら、トルストイとニーチェどころか資本論入門からそれと全く別の門(田村泰次郎の「肉体の門」)まであるのですから、「人格」より「容器」への転落もここに至ってきわまれりと云わねばなりません。
- (6) だいたいラートブルッフの批判した様な教養の断片性と総花的性格は高度資本主義の下での生活の機械化と類型化に伴ってどこにも現われて来る現象なのですが、日本の場合は、本来の後進国根性と敗戦による劣者心理によって輪をかけられた焦燥感が、そうした一般現象の上にオーヴァラップしているためにヨリ一層露骨な形態をとるのでしょう。しかも、われわれが最も恐れなければならないのは、こうした教養内容の無政府的氾濫それ自体ではなく、その様な氾濫する「文化」の洪水のなかに形成されて行く一定の精神態度です。
- (7) いいかえれば次から次へと相異なり相矛盾するものを受け入れて行くことに憧れ、それに疑問を感じなくなった精神とは、裏をかえせば救いのないニヒリズムではないでしょうか。
- (8) そうして第一次大戦後のドイツにおいて、ラートブルッフの警告した八方美人的受容性 (Allseitige Empfanglichkeit) の心理こそは、冥々のうちにナチズムの制覇をはぐくんだ土壌であったのです。
5. (1) むろん、だからといって盛り合せ音楽会がそのまま一直線に将来のファシズムに通じるというわけではありません。いかに陽気のかげんでも僕の神経もそこまでたかぶっていません。
- (2) けれども戦後やかましくいわれる日本人の主体性の欠如というようなことも、誰の目にも明らかかな政治や社会問題についてだけ指摘されるのでは十分でないので、存外無意識のうちに看過されている一見何でもない様な身の現象のなかにひそんでいるものを別抉して行くことが大事じゃないかと思うので、つい音楽会論から脱線して風呂敷をひろげてしまったわけです。それともやっぱり僕の感性は少々異常でしょうか。

P337 ~ 343

<コメント>

日本人の文化の享受方法、もっと言えば、日本人のものの考え方、思考方法についての痛烈な批判。ものを考えるときには基軸となる基本的な精神・思想に基づき行ふべきと考えます。「保守」や「リベラル」など、一本筋が通っていないと、ただ右往左往するだけで終わってしまうからです。極めて示唆に富むエッセイと考えます。

2023年3月20日(金)林明夫